

水源の森再生プロジェクト #6

～昔の石畳を極める～

源流大

2022年10月8日(土)～9(日)開催 参加者52名

◆プロジェクトの目的と概要◆

～自然と共生する昔の知恵に学び、山を育て、自分を育てる～

2021年6月から始まった本プロジェクトでは、かつての「山と向き合う土木造作」をもう一度甦らせ、針葉樹人工林を落葉広葉樹の入り混じる水源涵養力の豊かな森に戻していきます。同じ現場での活動を継続することで、その変化を体感しながら学びます。「山に向き合う姿勢・視点」を養い自然を読み解く観察力を身につけることを目標にし、日本各地で環境再生を指導できる人材を養成していきます。

◆昔の石畳を極める◆

▼石が育てる山の水源涵養力

小菅村には山にも畑にも、家の周りにもいたるところに石があります。石も、ただ地面に積んで置くだけでは、土地に馴染まず不安定なままです。しかし、石積みや石畳を組み、土地と一体となるようにすることで、水源涵養力を高める機能を持つ場所に変化します。

昨年10月の講座では、石積みで斜面を安定させる施工を学びました。今回、石畳を施したのは、水源の森の入り口から続く道です。人が何度も通る道は、石畳にすることで、人が歩いても踏み固められず、降った雨が地表を流れることなく水がしっかり地中に浸透する道になります。

現場の山林にある大量の石は、皆で一列になってリレーで作業場所まで運びます。これも50名近くの人が集まったからできる作業です。



道の地表面に炭・燻炭と落ち葉を敷いて、その上に石畳を施す。



傾斜のある道は、階段状に段を切り、地表を水平にする。今回は、段差になるところを石畳・石積みで安定させる。



大人数で動き回らず、一列になってリレーで作業場所まで石を移動。これも土地を傷めない作業の方法。

▼地形を読んで、作業を考える

第1回の講座から毎回大事にしている作業は石畳でも同じです。石畳を組む時も、階段状にしたり、スロープ状にしたり、その地形にあったやり方を考えながら試行錯誤するため、土地の状態を読み取るようになることが重要です。斜面の傾斜をそのままにせず、水平な段を切って水が斜面を走らないようにする。それから炭や燻炭や落ち葉を敷く。今回は藁も使いました。さらに、大きな石を敷き詰めたあとに「瓦」をすき間に差し込みました。工場の廃棄物になってしまう瓦も、菌糸が乗って土中環境を改善する資材として再利用できます。

講座での作業の後、地球守チームが活動を進めている箱根古道をはじめとする、今に残る石畳の実例を写真で紹介しました。2回目となった座学講座&質疑応答も、参加者の本拠地での実情や活動について共有できる良い機会になっています。



50人が2mずつ作業するだけでも100mにわたる石畳が完成しました。入口から続く道は石畳の道に生まれ変わりました。この道は、水源の森の幹線道路にあたり、人がよく通る道であることから、今回施工した石畳の他、藁や落ち葉で地面を荒らさないよう工夫しています。



石畳作りを実践してみたら本物の石畳を写真で学ぶと、自分のやった作業が土中環境に対してどのように繋がるのか、理解することができました。



講師 / 『土中環境』著者
NPO法人地球守 代表理事
高田 宏臣氏



◆もっと詳しく知りたい方へ◆

本講座で学ぶ技術・視点は、高田宏臣氏著『土中環境』や、NPO法人地球守発行「地球守の自然読本」にて紹介されています。

☆お問い合わせ☆ 多摩川源流大学 ☎ 0428-87-7055 ✉ info@npokosuge.jp

- 主催 多摩川源流大学 (NPO法人多摩源流こすげ)
 - 技術協力 NPO法人地球守・株式会社高田造園設計事務所
 - 後援 小菅村役場
- ※本事業は、公益財団法人やまなし環境財団の助成事業です